

## 父の涙

金野 千津

母の長姉の訃報が届いたのは、父の葬儀を終えて三ヶ月経った頃だった。「わざわざありがとな」笑顔で迎えてくれた従兄が入棺の時に不意に流した涙を見て、「父は泣いたことがあるのだろうか？」という疑問が私の頭をふとよぎった。そして、その事を考えているうちに、なぜか祖母の臨終の場面が思い浮かぶようになった。

祖母は、九年前の秋に百歳と半年でこの世を去った。肺炎で何度目の入院をした病院で最後の時を迎えた。

病室の祖母には父がずっと付き添っていた。夕方、母とともに父への差し入れを手に病室を訪れると、「危ないらしい」そう父が告げた。

祖母の体に付けられたモニターの血中酸素濃度の値は七十パーセント台に下がっていた。九十パーセントを切ると息苦しさが強くなると聞いていたから七十パーセントではかなり危険な状況である。

鼻から送る酸素量は最大になっているが、少しずつ酸素濃度の数値は下がってきている。「今日でお別れだな」そう私は確信した。同時に、祖母がこの世を去るその瞬間を見たくない、立ち合いたくないという思いが強く湧き上がってきた。生と死を分ける瞬間が、私にとっては得体のしれない恐怖の時間に思われた。大好きな祖母との別れが何を意味するのか、現実として肌で感じるのが怖かったのである。

「今晚が山のようだから、夕御飯のあと出直してくる」母と二人、病室を後にした。

父からの電話があったのは、あり合わせの材料で作った、出来上がったばかりのチャーハンを食べようとしていた、まさにその時だった。「ばあちゃんが無くなった」母にせかされながら湯気が出ているチャーハンを慌てて頬張ると、病院へ車を走らせた。バタバタと病室に駆け込むと、父が静かに見守るベッドの上に、動かなくなった祖母がいた。触れると、少しずつ体温が失われ始めていることが分かった。「遅くなってごめん」と言うと、「ばあちゃんとゆっくりお別れできたから良かった」と父はつぶやくように言った。その顔は少し

微笑んでいるようにも思えたので、長く介護を続けて来た父が、ひと仕事を終えた安堵感とともに祖母の死を受け入れているのだと感じ、「父ちゃんも、お疲れ様」と声をかけたように記憶している。

私がこの頃、何度も繰り返すように頭に浮かべる場面は、まさに父と祖母が二人で過ごした病室での様子なのである。

南に面した病室の左奥の窓際に、父が窓を背にして静かに座っている。秋の夕方、斜めに差し込むオレンジ色の西日が、二人をやわらかく包んでいる。祖母は父のほうに顔を向け、眠っているようでもあり、何か話しているようにも見える。一枚の絵のように頭に浮かぶその場面だが、私には三人だけの時間が、ゆっくりだが確かに動いていることが感じられるのだ。

父は、祖母との別れの時間をどのように過ごしたのだろう。私たちが立ち去った後の病室で、少しずつ呼吸が弱まっていく祖母を目の前にして、どんな気持ちでそこにいたのだろう。意識のない祖母と、どんな会話を交わしていたのだろう。三十代で夫を亡くし、四人の子供を女手一つで育て上げた祖母。その苦勞を、最後までそばにいて見

つめ続けて来た父。二人の別れの時間は特別なとき時間だったに違いない。

父と祖母との二人だけの病室の一場面、私はそれを、実際に目にした場面だと、つい最近まで思い込んでいた。しかし、ある時、はたと気が付いた。祖母の亡くなった病室は北向きだったではないか。ベッドの位置も全く違う。入口を入ってすぐの左側だった。なぜ、私の記憶の中の祖母の臨終の場面は、あんなにあたたかな光の中にあるのだろう。なぜ、私は自分の記憶を作り変えていたのだろう。

私は、父と祖母との別れを一つの象徴的な場面として記憶し直していたのではないだろうか。父との別れの時間を持ってなかった私は、祖母と父が過ごしたその時間が、父にとって必要な時間だったと感じているのだ。

祖母の病室に駆けつけた時、父が微笑んでいるように見えたのは、祖母と共有した多くの時間に悔いなく感謝できた、父の心の平穏が見せたものだったのではないだろうか。

私は、「父の涙」を見たことがない。父の七十八

## 王国の才ニギリ

金野千津

年の人生にどんな涙があったのだろう。私は、父が人生のどこかで密かに流したのであるう様々な涙を、父と共有したかったのだ。父がそうだったように、感謝とともに父を送ってあげたかったのだ。「父の涙」が気になるのは、父の人生にもっと寄り添いたかった私の「悔い」なのかもしれない。取り戻せない父との、あまりに急だった別れの時間への「焦燥」からなのかもしれない。

私は今、父を知る人たちから父の話聞き、父の遺品や思い出の場所で父を思い、父と会話し、「父の涙」に思いをはせている。足りなかった父との時間を埋め続けている。

人はそれぞれ育ってきた環境や、経験、知識などが違う。理解できない他人の行動でも、価値観が違うと思えば、大抵は寛大な気持ちで受け入れることができる。しかし、家族は、遺伝子を分け合い、長い時間を共有しているからこそ、言葉にしないで理解し合える部分が多いと思っていた。だが、なぜか母だけは、私にとって一番近くにいたながら、どうしても理解しがたい人間なのである。正直、このことはお互いのストレスを引き起こし、つまらない争いの原因にもなっている。そこで私は、母を理解する手段として、一つの考え方を取り入れることにしてみた。

それは、人は誰もが、自分が作る国の王様だという考え方である。この考えを母の行動に当てはめると、今まで理解しがたいと思っていた行動に説明がつくように思えるのだ。

母は人に何かをして欲しいとき、ストレートに

頼まないことが多い。私の近くにある新聞を手渡して欲しいとき、テーブルの向こうから「ねえ、新聞に手が届く？」と聞いて来る。テレビでさんさ踊りの中継を見ながら、「もう一度くらい見たいなあ」と私に聞こえる程度につぶやく。「新聞を取って」「さんさ祭りに連れて行って」と言われれば、「いいよ」とか、「じゃあ、来年計画しようか」と言えるのに、あえて遠まわしに「私の気持ちを理解して、自主的に行動して」と言われているようで、なんとなくイラつくのである。

「届くけど何か？」「行きたいなら行けば」と意地悪したくなる。そこで、王様理論を取り入れて捉え直してみる。『私は王様なのだから、お願いはしない。命令するのは簡単だけど、自主的に私のために動けるよう、気持ちに気が付くヒントを与えているのよ』と、考えるわけである。

また、母はご近所の人ではなく、郵便配達人や、たまに来る宅配便のお兄さんにお菓子をあげたり、缶コーヒートを振る舞ったりして、サービス過多ではないかと思える行動を取る。私は、隣近所の方に対してならまだしも、「仕事で訪問する人にそこまで……」と、母の取る行動に疑問を投げかける

のだが、本人はとても満足げで、販促品のノルマ達成への協力を買って出たりしている。

これを王様理論で捉え直すと、王様は支配地域で安定した生活を送る自国民に対して、特別な何かをする必要がないと考えているのである。それよりも、自分を支持してくれる国民を増やすことこそ国益に繋がるわけであるから、時々資金投資をしても、自国民が増えることで王様としての立場に、より満足を得たいと考えていると捉えなおすわけである。

私のストレスが一気に上がる母の行動がある。母は自分で盛り付けた料理を必ず手渡しで受け取らせようとするのである。例えば、母が自分で作った煮物を器に盛り付けたとする。後ろのテーブルで和え物などを作っている私に、「はい」と言っ

て手渡そうとする。私は作業中であるので、母が自分でちょっと歩いて食卓テーブルに持って行っただ方が効率が良い。それが無理なら、「運んでね」と言っ

て、テーブルの空きスペースにでも置けば、母も私も時間のロスなく作業に移れる。しかし、母は私が作業を中断して受け取るまで、煮物の入った器を手に持って私に向けて差し出しているの

である。

手渡すことで、繋がりを感じたいという温かい気持ちからと言われればそれまでだが、その気持ちを感ぜられないほど、毎回行われるその行為は、私の気持ちをイラつかせ、「やってあげているんだから、感謝して受け取りなさい」というメッセージのようで、どうしても受け入れがたいのである。しかし、これも王様理論に当てはめてみると、王様が自分の時間を割いてわざわざ作ってくれた貴重な食事なのだから、感謝して差し出された食事を受け取るのは国民として疑問の余地のないことなのである。

そもそも、王様理論の発想は、実家に戻ってからの私を、両親が「殿」と呼ぶようになったことに端を発している。自宅では食つちや寝の生活で、掃除洗濯一切母がやっていた私を、両親は皮肉を込めて「我家の殿」と呼んだ。母の行動の理由を自分なりに理解しようと思ったとき、私の中に「殿」と呼ばれていた勝手気ままな自分が浮かんだのだ。

父という側近を失って、母は王国でひとり過ごす時間が多くなった。話し相手も、買い出しの運

転手もいなくなってしまうた母は、同居する国民の帰りをじっと待っている。王様として振る舞う時間は貴重なのである。

私が遊びに出かけようとする、母は「オニギリを持って行きなさい」と言う。たまの休みで、外食も楽しみのひとつなのであるが、母はオニギリをぐいと差し出す。王様は王国をしばし離れる国民に、「この国を忘れないで」とのメッセージを込めてオニギリを握る。

やや不格好な丸形の母のオニギリは、不器用な母の王国の象徴のように思える。